

近畿圏におけるニホンザル分布の実態調査の2年目として、本年度は兵庫県を中心として分布状況の調査を行った。

調査質問紙を県下各市役所、町・村役場（91市町村）に送付し回答してもらったところ、回収率は約75%であった。1978年の環境庁の「緑の国勢調査」の調査報告では、1）篠山町から京都府境にかけての多紀連山、2）神崎郡大河内町付近、3）佐用郡南光町、4）美方郡美方町、5）洲本市灘の5地域で集団の生息が確認されたと報告されているが、今回の回答結果からも概ね同様の地域で集団の生息が確認された。これに対して、今回の調査結果では豊岡市、城崎町、竹野町、日高町などの但馬北部に集団の生息が確認され、1978年の調査結果で確認されなかった地域で集団の生息が確認された。この地域の集団は、近年になって姿を現し農作物に被害を及ぼすようになったようである。元々近くの山に生息していた集団が植林の影響で農地へ出てきたのではないかと報告もあった。このように、但馬地方においては集団数および分布域が以前より拡大している可能性が考えられるが、集団数、個体数あるいは遊動域等の細かい点についてはよく分かっていないのが現状であり、結論を出す前に詳細な調査が必要であると思われる。

また、これら集団の生息地の間で、集団ではないがハナレザルなどの存在が確認された地域が多くあった。1978年の調査結果と比較して確認された地域は増えているものと思われる。集団の生息ではないが、集団間の個体の移動を実証する資料として興味深い。

来年度は、特に但馬地方を中心として調査を行い、兵庫県下におけるより精度の高い分布状況を明らかにしたい。

計画1-7:

伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数

岡野美佐夫・宮本大右・濱崎伸一郎
(野生動物保護管理事務所)

伊豆・箱根地域のニホンザルの分布と個体数を調べるため、郵送アンケート調査、聞き取り調査、カウント調査を実施した。

箱根地域については昭和30年代から分布に関するデータが蓄積されているため、アンケート調査

は省略し聞き取り調査で分布変化の把握に努めた。その結果を動物分布調査（環境庁1978年）の分布メッシュ図と比較すると、群れの生息区画数が10から9に減少し、群れ以外の生息区画数が1から2に増加しただけで区画数に大きな変化は認められなかったものの'78年調査で生息が確認されていなかった箱根地域北部（小田原市北西部、南足柄市南部）への分布拡大が認められた。また、1986年に神奈川県が実施した調査では5群（S、H、T、P1、P2）の生息が確認されていたが、このうち箱根町の畑宿に定着していたとされるP2群は聞き取り調査で確認されず、移動ないし消滅したものと判断された。平成2年の9月に実施したカウント調査の結果は、S群が55頭、P1群が21頭であり、'86年調査の結果と比較すると2つの群れとも漸増している。この他、聞き取りによりH群と思われる群れが約50頭いるとの情報を得たが、T群の個体数については情報が得られず、箱根地域全体のニホンザルの個体数の変化に関しては、今後も調査を継続していかなければわからない。

伊豆地域に関しては郵送アンケート調査とこれを補足する聞き取り調査を実施した。アンケートは農協の各支所と鳥獣保護員を対象に191通を配布し、回答率は60.7%（116通）であった。その結果群れの生息を確認した地域は、愛鷹山東部から南部にかけての地域（裾野市、長泉町、沼津市）、箱根地域に隣接した熱海市北部および函南町北東部地域、天城山脈より南の伊豆半島南部地域（東伊豆町、河津町、下田市、南伊豆町、松崎町にまたがる地域）の3地域に分かれた。'78年の分布調査（環境庁）と比較すると群れの生息区画数は42から32に減少し、群れ以外の生息区画数は15から26に増加した。実際に群れの分布が縮小したかについては、さらに聞き取り調査を実施し検討する必要がある。また、群れサイズに関しては、平成3年度の共同利用研究で調査する予定である。

計画1-8:

鈴鹿山系におけるニホンザルの分布

増井憲一（森林生態研究会）

鈴鹿山系において1975年以来ニホンザルの分布と生息状況に関する資料の収集を断続的に行っているが、1990年7月中旬に1週間、本共同利用